

D-6 社会福祉施設収容児の栄養学的研究
北海道大農 山東せつ子

目的 小児の成長と栄養の関係を調べる為に、北海道内養護施設収容児を対象として、1960年以来5年間隔でその栄養状態を調査しているが、1970年の結果の一部が出たので報告する。

方法 調査は1970年4月から9月までの6ヶ月間に行なわれ、対象は24養護施設に収容されている3才から14才までの男子923名、女子554名、計1477名であった。身体計測と食餌摂取量秤量を行なった。身体計測は、身長、体重、座高、胸囲、頭囲、上腕囲、上腕並びに背部の皮厚の7項目であった。食餌摂取量秤量は身体計測の翌日1日ととり、調理前後の食品重量、対象児各個の喫食量より個人別食品摂取量を求め、食品成分表で栄養計算を行なった。

結果 身体計測値を文部省の北海道平均値と比較してみると、男女共身長、座高は12才以後差は大きくなる。体重、胸囲は共にすぐれているので、ずんぐりむっくり型となる。10年前はほぼ1才遅れの体格をしていたから、10年間の伸びは、道平均の4倍になる年令層もあり、道平均との差はかなり縮まっている。栄養素摂取量は、ビタミンA、ナイアシンが所要量に達しない施設が半数あり、20%の施設では女子にカルシウム不足がみられる。ビタミンDは平均6%の摂取で、成分表の不備のためと考えられる。始めて道内の全養護施設を訪れてみて、食事摂取面から見た成長期小児の生活指導の問題、それに伴う職員の時間的、労力的管理の問題、設備とその利用の問題等政策的な面から今後解決しなければならない多くの問題点を見出した。